

「底が突き抜けた」時代の歩き方 395

ボスニア紛争に勝利をもたらすことによって、

自社のPR効果を最大に発揮した「戦争広告代理店」

パニッチ・ユーゴスラビア連邦首相にとっても、PR企業リーダー・フィン社の社員ジム・ハーフにとっても、最大かつ最終決戦としての意味をおそらく持つであろうロンドン会議に、各々がPR戦略を周到に推し進めながら臨もうとしていた。ハーフは《ロンドン会議に向けて誘導すべき国際世論はどのようなものか、その基本方針》を、「戦略的メッセージ」として次のようにまとめた。

- 《 1、侵略者は大セルビア主義を強制しようとしている
- 2、ボスニア・ヘルツェゴビナ政府は、国民の投票によって選ばれた法的に正当な政府である
- 3、セルビア人はテロリストで侵略者であり、ボスニアが犠牲者である
- 4、交渉は、セルビアの軍事力の脅しのもとで行われるべきではない
- 5、侵略者は組織的に民族浄化を進めている
- 6、侵略者は強制収容所をボスニア各地に設置している
- 7、国連のもとで軍事力がボスニア全土に展開されるべきである
- 8、セルビアに対して科している経済制裁は厳格に実行されなければならない
- 9、国際社会は、テロリストたちに交渉の機会を与えることによって、彼らに法的な存在根拠を与えてしまっている
- 10、ボスニアの民主主義のため、憲法制定の準備が必要である
- 11、人道に対する罪を犯した者には、戦争犯罪法廷の裁きが行われなければならない

セルビア人に「侵略者」という言葉を被せるのは、《5月以来続けられてきたハーフたちのPR戦略の集大成》であり、《また「テロリスト」を多用して非難するのは、十年を経た現在でもそのまま通用するセンス》だが、《民主的な憲法制定と戦争犯罪法廷設置》こそは、《人権と民主主義を金科玉条とするアメリカ》人に訴える、《具体的な成果を目指した提案だった》。ロンドン会議で、「ボスニア政府は民主的な憲法の制定に着手した。ついては各国の支援を要請したい」と提案することができるなら、《西側のメディアや外交官に大きな共感を呼ぶことは間違いなかった》し、《戦争犯罪法廷を設置しセルビア人を裁くべきだ》という、後に実現した考えは、《第二次大戦後のニュルンベルクと東京以来の国際戦犯法廷を開くという画期的なアイディアであり、セルビア人が、ヒトラーや東条英機と同様の犯罪者である、と国際的に承認するよう求めるのと同

じだった》。

他方、《ユーゴスラビア連邦のパニッチ首相は、会議で提唱する「五カ条の行動計画」を用意した。セルビア側に「民族浄化」があったことをあらためて認め、その停止を誓うことを柱にしていた。それは、客観的に見ても、大胆かつ内容の濃いものと言えた。これをロンドン会議の本会議で提出し、さらに記者会見で高らかにうたいあげ、同時にミロシェビッチ大統領の退陣を求めようというのだ。》両陣営の事前の動きが活発化する中、《会議開催の前日には、誰もが予測しなかった二つの辞任劇が起こり、ロンドンに大挙して集まりつつあった各国の代表団とメディアを驚かせ、会議の行方にも微妙な影を落としていた。》

一人は開催国イギリスの元外相で、《ロンドン会議を国連とともに共同開催しているECの和平特使キャリントン卿》で、《モスLEM人側にもセルビア人側にも、同時に責任がある、という考えの持ち主だった。おたがいの勢力が自分の側に属する人々をわざと砲撃し、それを敵の攻撃だと言って「われわれはこんなにも被害をうけている」とアピールする、という言語道断の戦術をとっている、と考えていた。》このような「中立」的な立場を取るキャリントン卿を、ハーフはカナダのマッケンジー将軍に対してそうであったように、攻撃の対象にしていた。非難《文書をばらまかれ、お前はセルビア人の味方をするのか、とメディアからの攻撃にさらされることは、功なり名を遂げ、上流階級に属するキャリントン卿にとって耐え難いこと》であり、《ロンドン会議前日の辞任には、せめてもの抗議の意思が込められていた》。後任には、《セルビアに厳しい発言で知られる》元イギリス外相のオーエン卿が指名された。

もう一人はアメリカ国務省の旧ユーゴスラビア担当官、ジョージ・ケニーで、辞任後、「これまでに得た情報から、セルビア人に責任があることは疑いがない」「モスLEM人は、悲惨な無実の被害者だ。暴漢にいきなり襲われたようなものだ」「アメリカは、ただちにボスニア・ヘルツェゴビナに空軍を送るべきだ」とコメントして、ハーフからイゼトベゴビッチ大統領や、シライジッチ外相との、《辞任前の一中堅官僚の身分からは夢のような》会談を申し入れられ、気をよくしてボスニア《政府よりの発言はさらに加速していった》。要するに、二人の辞任はハーフにとって勝利を意味しており、更にケニーの辞職はロンドン会議にアメリカ政府代表として出席する、ミロシェビッチとも親交があるセルビア寄りのイーグルバーガー国務長官代行に大きなプレッシャーを与えていた。

8月26日、ボスニア紛争の解決に向けて《世界のメディアが注目》するなかで、ロンドン会議は開幕したが、《会議場へのIDを手にした各国の参加者たちは、この会議が実質的な話し合いの場ではなく、それぞれの立場を宣伝するパフォーマンスの場でしかないことを知っていた》。ユーゴスラビア連邦の《パニッチ首相は、もともと自分の発言の場を確保する目的でこのイベントの開催に動いた。アメリカのイーグルバーガー国

務長官代行は、「ヨーロッパの裏庭」で起きている紛争に、本音では深入りしたいとは思っていなかった。イギリスのメージャー首相や、フランスのミッテラン大統領は、ボスニア・ヘルツェゴビナで渦巻く憎悪と流血の混乱は、二日や三日の会議で解決できるものではない、ということを知っていた。ニューヨークからやってきたエジプト人の国連事務総長、ブトロス・ガリは、バルカンよりもアフリカでおきている悲劇にこそ、世界の関心が集まるべきだ、と思っていた。そして誰もが「強制収容所」問題を頂点とする国際世論の高まりを前に、ボスニアの問題を放置している、という非難を回避したいと思っているだけだった。そのためにロンドンに皆が集まっていた。そして、会議場のQE2が「劇場」であり、行われるのが「演技」であればあるほど、ロンドン会議は振付師であるハーフの腕の見せ所となっていたのである。》

開催国イギリスのメージャー首相が各国の「演技」の先頭を切って、「セルビアは、自らが国際社会の一員になるつもりがあるかどうか、自問しなければならない。もし答えがNOならば、今後一切の貿易も、援助も、国際的な承認もなくなる。経済的な、政治的な、文化的な、そして外交的な孤立あるのみだ」とセルビア非難を行えば、同じイギリスの外相ダグラス・ハードも、「旧ユーゴスラビアの人々が味わっている苦難は、運命のいたずらなどではない。セルビアのあくどく意図的な侵略行為によっておきている」と追い討ちをかけ、クロアチアと親しいドイツのキンケル外相が、「ベオグラードこそ、邪悪の根源である」と言い切った。イーグルバーガー国務長官代行は参加者が訝るほどの沈黙を守っていたが、水面下でボスニア政府と接触しており、《コミュニケーションはすでに完全にできていた》。

シライジッチは、「もし、この会議が明確に、セルビア人に対してボスニアから出てゆけ、というメッセージを出さなければ、それは 殺人許可証 を彼らに与えるのと同じだ」と発言して、ハーフ仕込みの随一の役者ぶりを発揮した。ハーフは彼に《影のように従い、サポートし》て適切な指示を与えた。一方、《本会議場で勝負をかけるタイミングを見計らっていた》パニッチは、共同議長の一人、ガリ国連事務総長がミロシェビッチ大統領に質問を發した時に、ミロシェビッチを押しつけて、「議長、その質問は私にしてください」と大声で叫び、続けてミロシェビッチに、「君は座りたまえ。この国を代表するのは私だ」と言い放ち、怒りで顔を真っ赤にしたミロシェビッチが反論しようとする、「だまれ」と一喝した。

《議場全体が、予想外の出来事に静まり返った。世界中の代表団や国連事務総長の前で、同じベオグラードからやって来た連邦首相が共和国大統領を「だまれ」と叱責し座らせたのだ。それは、各国のベテラン外交官たちにとっても前代未聞の光景だった。》これは やらせ でもなんでもなく、《セルビア人の「悪」をすべてミロシェビッチに負わせる決意を固めたパニッチ》の大芝居で、会議が休憩に入ると、すぐさまミロシェビッチに、「この場で、ボスニア紛争の責任をとって大統領職を辞任したまえ」と迫った。《ミ

ロシェビッチは、何を言うか、と拒絶した》が、パニッチは会議後の記者会見で、「私は、平和を達成するためにミロシェビッチ大統領に辞任を要求しました」と言うことができる。《それは、本会議場の衝撃のエピソードとともに、セルビア陣営の中で地殻変動が起きている、というニュースとなって大々的に報道されるはずだった。》しかし、《実際はそうはならなかった》。

ボスニア政府主催の記者会見で、少し疲れた表情で《いつものように得意の英語でスピーチをはじめた》シライジッチ外相の《背後の壁には、あの「鉄条網ごしのやせた男」の写真や、難民となったいたいけな表情の少女の写真が、一辺数メートルの大きさに引き伸ばされてかかげられ、ちょうど報道陣のカメラがシライジッチの姿をおさめるときの背景にくるよう配置されていた》。司会役のハーフはシライジッチに対する記者の質問後、舞台の袖から現れた《一人の女性と、彼女に手を引かれた二人の幼い子供》について、「彼らは、つい最近ボスニアの強制収容所から奇跡的に逃れ、ロンドンにたどり着いた難民の親子です」と説明した。「セルビア人たちは私をなぐりました。それだけではありません」と、《女性は自分の服をはだけ、肌をさらし、お腹を突き出し》て、「見てください。ここに、やつらが真っ赤に熱した焼きごてを押し付けたんです」と、やけどの痕を見せた。

《すばらしいインパクトだった。舞台上にあったカメラから取材陣を撮影した映像が残っていて、そこには衝撃のあまり呆けたように難民の母親を見つめて立ち尽くしている女性記者の姿が捉えられている。

直後に、難民女性のその姿を逃すまいと、スチル、ムービー、両方のカメラマンが壇上に殺到した。

その次に起きたことを、ハーフは今も得意げに語る。

「あまりに多くのカメラマンがステージに殺到したので、即席の舞台が音をたてて崩れてしまったんです。みんな命があぶないところでした。このモスLEM人親子はそれほどの視覚的効果を与えていたわけですよ。この会見の成功は私たちの誇りとするところで。」

この女性の出自についてハーフは、「彼女は私たちがロンドンに連れてきたのではありません。ロンドン会議の準備をしているとき、ボスニア政府代表団のスタッフから、最近現地から逃れてきた親子がいる、という話を聞いたので、ぜひ彼らを会見に呼ぼうと思い立ち、マザレラ君と相談してすぐ手配したのです」と語っており、著者は、《優れた「素材」が近くにある、ということを見逃さず、それを即座に料理して最大の効果をあげるように持ってゆくのがプロの技術なのだ。》と賞賛する。パニッチも記者会見を主催したが、《すべての面で準備不足》で、会場も小さく、《助けを借りるプロがない悲しさ》の故に不手際が目立った。《西側の記者たちの多くが、パニッチよりもあくまでミロシェビッチ大統領を追いかけたこと》も、誤算だった。ロンドン会議は「劇場」

にほかならなかつたから、《セルビア政界の実権を握》る《ミロシェビッチは、「ロンドン劇場」を楽しむために、これ以上は望めない最高の悪役だった》のだ。

ロンドン会議は《三日間の予定会期を二日に短縮して終了し》、採択した《宣言には、戦闘をただちにやめること、重火器を国連の監視下におくこと、ユーゴスラビア連邦政府も含め会議の参加者全員がボスニア・ヘルツェゴビナの国家承認をすること、収容所を閉鎖すること、などがうたわれていた》が、体裁にすぎなかつた。最初から最後まで「劇場」だったロンドン会議での唯一の実質的な取り決めは、《国際戦犯法廷を設置し、人道に対する犯罪を捜査して裁く》ということだった。ロンドン会議では《パニッチ首相は新しい戦略をもつてのぞんだが、圧勝したのはまたもやハーフとシライジッチだった》が、《しかし、ロンドンでのPR戦争の勝利をよそに、サラエボの戦火は収まる気配がなかつた。》

ロンドン会議での国連の《ガリ事務総長の心の底にあったのは、ボスニア・ヘルツェゴビナ政府だけが悲劇のヒーローとなっている事態への反感だ。西側各国の本音は、石油も、他のさしたる資源もないヨーロッパの辺境ボスニアに軍事力を投入して若い兵士の命を危険にさらす事態だけは避けたい、というものである。いずれもセルビア人がすべて悪い、という世論があまりに強くなり、それがやがて、やつらを力で叩くという声になることを恐れていた。ガリが持ってきた宣言案は、そういう彼らの本心を反映していた。その老練な外交術に、イゼトベゴビッチ大統領は舞台裏で負けてしま》い、ハーフとシライジッチ外相にとっては、ガリ事務総長や西側各国の首脳に、《誰の目から見ても疑問の余地なくセルビアが悪の根源であると示す》機会を必要としていた。《ハーフの行動は素早かつた。ロンドン会議が終わつた6日後、9月2日には、国連総会をどう乗り切るかについての総合的なプランを作っている。》

その中でルーダー・フィン社はユダヤ人社会に対して、積極的なPR活動を行った。ルーダー・フィン社のCEOデビッド・フィンも、「強制収容所」をスクープしたガトマン記者もユダヤ人であつたように、ボスニア紛争でのPR戦争ではユダヤ人が陰に陽に活躍していた。また、《ボスニア紛争では、セルビア人とナチスのイメージが重ねられたために、ナチスの被害者、ユダヤ人の存在がひとときわ重要にな》るという面もあつた。《ハーフの事務所に残されていた文書には、ルーダー・フィン社が世界各地のユダヤ人団体と接触していたことがはっきりと記録されている。》ボスニアのモスLEM人は《アラブ民族ではないが、同じイスラム教徒であるアラブの国々の首脳に、シライジッチやハーフたちは何度も接触し、援助を願い出て実際に資金を得ていた。ユダヤ人の国イスラエルと、周囲のアラブ諸国の宿命的な敵対関係を考えれば、ユダヤ人の支持を得ることは簡単ではなかつた。だがハーフたちは、ユダヤ人の細かい心情を理解し、細心の注意を払つて味方につけることに成功した。》

ロンドン会議でパニッチ首相に「だまれ」と一喝されたミロシェビッチと、パニッチ

の対立は決定的になり、会議後の8月28日に西側の記者を集めた会見で、パニッチは「私は連邦首相であり、共和国大統領のあの男より上位にあるのだ」と強弁して、「もしミロシェビッチがロンドン会議の結果に従わなかったら、私が彼をクビにする」というと、記者団から笑い声が上がった。《誰が考えても、国内の政治基盤はミロシェビッチのほうがパニッチよりもはるかに強固だった。また、ミロシェビッチはまがりなりにも国民の選挙で選ばれていたが、パニッチは政府に指名されて任命されただけである。そのパニッチがミロシェビッチの任命権を持っているとは制度上も考えられなかった。》西側諸国からの命令をうけて動き、ユーゴスラビア連邦を彼らに売り渡そうとしている」という理由で、むしろパニッチのほうがユーゴスラビア連邦議会で、ミロシェビッチ派の議員たちによって首相不信任案を提出された。

しかしパニッチは、「自分だけがアメリカと話を付け、経済制裁を解除させることができる」とアピールし、アメリカによる厳しい経済制裁措置がしだいに効果をあげはじめ、物価が上がり、闇経済がはびこる中で、《国民もこの苦しみを軽減してくれるのなら、とパニッチに期待する声が高まりはじめた。》9月11日のベオグラードの有力週刊誌『ニン』の支持率調査では、《半年前まではセルビアで誰もその名前を知らなかったパニッチ》が、ミロシェビッチの32%を大きく引き離して、一位の45.5%を獲得し、「誰かがこの混乱から助け出してくれるとしたら、それはパニッチしかいないだろう」という市民の声を伝えていた。《こうしたパニッチ人気を見て、不信任案は撤回された。パニッチはとりあえず国内政治での足場固めに成功した》が、《そのパニッチのもとに、ユーゴスラビア連邦を国連から追放せよ、という声が急激にもりあがりはじめた、という知らせがニューヨークからもたらされた。》

92年9月15日に始まった国連総会は、議長選出のみで終わる例年とちがって、「ユーゴスラビア連邦の追放を求める」というイギリスの国連大使の発言を皮切りに、トルコ、オーストリア、アメリカの国連大使が次々に同調し、《たちまち議場の空気を支配する大きな流れとなった。舞台裏ではその日のうちに「ユーゴ追放勧告決議案」と題された文書が、各国の代表部に配られていた。》パニッチは自らの存在意義を賭けて、《最後の逆襲を開始した》。専用ジェット機でただちに、《国連で強大な力を持つ常任理事国5カ国のうち、ユーゴスラビアに心情的に近いと思われる》北京とモスクワを歴訪し、《追放回避を懇願》した。そして、《アメリカでの人脈を最大限活用して一本釣りしたメンバー》で、《PR戦略について相談できるアドバイザー》に「時間がない、何としてでも国連の議席を守るアイデアを今すぐ考えるんだ」と電話をかけまくった。

《イゼトベゴビッチ大統領は、ボスニア・ヘルツェゴビナを構成する三つの民族、モスレム人、クロアチア人、セルビア人のうち、実質上モスレム人を率いているだけ(...)なのに、ボスニア・ヘルツェゴビナ政府の大統領を名乗り、国連の議席を占めるのはおかしいと指摘》し、更に同大統領が、《イスラム教の過激思想を流布した》罪状によっ

て、《チトーの共産党政権時代、政治犯として投獄されたこと》を取り上げて、「イゼトベゴビッチ大統領は、じつはイスラム原理主義者だ。ボスニアをイランのようなイスラム教国家にしようと企んでいる」という非難も飛び出した。中国やロシアの公式な支持をパニッチが獲得する中で、《ハーフは「原理主義者」攻撃に反論》するために、「多民族国家（multiethnic state）」のキーワードを導入し、《それは「民族浄化」や「強制収容所」のように目新しく衝撃的な言葉ではないが、アメリカ人の心には深く静かにひびきわたる言葉だった。》

ハーフは「多民族国家」を強調するために、セルビア人でありながらボスニア政府軍に身を投じている、サラエボ生まれのディビャク将軍に照明を当て、ボスニア政府は《モスLEM人だけでなく、今は対立しているセルビア人やクロアチア人も含めた「多民族国家」を作ろうとしている、その証拠に、軍の枢要な地位に、敵であるはずのセルビア人さえ起用しているではないか》というわけだ。イゼトベゴビッチ大統領とともに訪米し、ボスニア政府軍で指揮を執るセルビア人の将軍としてメディアの脚光を浴びつつある同将軍は、《自分がPR戦略の道具として使われていたことを十分に自覚していた》が、《民族の裏切り者とみなされて》、もはや《セルビア側に戻る場所》のない彼には、《その役割を演じ続けるしかなかった》。

ニューヨークではハーフはボスニア政府の外交官の役割も果たし、《イゼトベゴビッチ大統領が到着する前の晩ホテルに籠り、一晩で大統領の演説原稿を書きあげた。それまでは、シライジッチ外相にしてもイゼトベゴビッチ大統領にしても、その演説原稿や手紙を書くときは、ハーフが原稿を書く段階から打ち合わせを繰り返し、だんだんと練り上げる手法をとった。それがPR企業とクライアントの正常な関係だからだ。しかし、今回は違った。》ボスニア政府の言い分はハーフにはよくわかっていたからで、「アメリカ人の心に訴える」ために、「人種のるつぼ」という点に最大の力点を置いた。《同時に、「イスラム国家樹立」を目指していると非難されたイゼトベゴビッチ大統領の口から「多民族国家」が飛び出すことは、そのまま攻撃への反論になった。》そして、以前に画家でもあったイゼトベゴビッチ大統領が何気なく口にしたジャクソン・ポロックも挿入して、「多民族国家」の《キーワードを、ある映像的な比喻で効果的に彩った》。

ポロックは、《1940年代に活躍したアメリカのモダンアートの画家だ。アメリカ人ならば一度は聞いたことがある有名な作家で、無数の色の絵の具をキャンパスにたらしめた抽象画で知られている。ポロックと聞けば、多くのアメリカ人がこの絵を思い浮かべる。それは他民族が美しく交じりあう様子を文字通り色鮮やかに表現していた。》国連総会の会議場に登壇したイゼトベゴビッチ大統領は、驚いたことに英語で演説をはじめ、下手ではあったが、《大統領の一言一言は、英語を母国語とする国の外交官たちはもちろん、議場につめかけていたアメリカ人の記者たち、そして、夜のニュースでこの演説の「ON」(演説やインタビューの音声をニュースなどの放送で使うこと)を聞くであろう全

米の視聴者の心に染み通ることが計算されていた。》

「私たちが目指しているのは、民族浄化ではなく、民族共存の国家です。イスラム教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒が交じり合い、正義と平等の名のもとに協力する国です。私は先週、モスLEM人、キリスト教徒、そして他の民族グループとともに、ボスニアへのユダヤ人定住5百周年を祝いました。なぜなら、私たちの国は、そのすみずみにまで他民族が共存し暮らしているからです」「それをセルビア人たちは野蛮な攻撃によって破壊しています。彼らは、セルビア人以外には基本的人権も自由も認められない国をつくりあげようとしているのです」

《演説が最高潮に達したとき、ハーフが工夫をこらした表現が聴衆の心の中に色鮮やかなイメージを浮かび上がらせた。》「私たちの国を一つの民族の色に染め上げようというたくらみを許してはなりません。ボスニア・ヘルツェゴビナは、あたかもジャクソン・ポロックの絵のような、さまざまな民族の色が入りまじった美しさを持つ国なのです」。ユーゴスラビア連邦のペリシッチ情報相は、「ゴーストライターがいるな、とすぐにわかったよ。イゼトベゴビッチの頭から、アメリカのモダンアートの画家の話をも演説に持ちだすアイデアなど、出てくるわけがない。自分も同じバルカン出身の人間だからよくわかる。あれはPR企業の作文に間違いはない。イゼトベゴビッチが国際的な価値観を持つ先進的な人間で、イスラム教の信条にこりかたまっているのではない、と印象づけるのが狙いだったんだ。それも徹頭徹尾、アメリカ人に向けてね。たしかに効果はあった。敵ながらあっぱれだったよ。ボスニアを多民族、多文化の国として見事に描いていたからね」と語っている。

「多民族共存のイメージには、多くのジャーナリストがごまかされてしまいました。現実には、ボスニア政府、つまりモスLEM人は他の二つの勢力、セルビア人とクロアチア人と同じように民族主義者の集まりでした」と、現地で長期間取材していたNPR（全米公共ラジオ）のシルビア・ボジオリ記者は語り、『USAトゥデイ』紙のカッツ記者も、「紛争当時から今回に至るまで、ボスニアは名前だけの多民族国家にすぎませんか」と言っている。

《この日のイゼトベゴビッチ大統領の演説は、多くの英語メディアに引用されて報道された。》つまり、大成功だった。一方、ロシアのコーズイレフ外相に懇願して、パニッチは常任理事国五カ国の外相が一堂に会する場を作ってもらって、最後の説得にユーゴスラビア連邦の運命を託そうとしていた。「私は今、ミロシェビッチとやるかやられるかの戦いをしている。私が勝てば、ユーゴスラビアは変わる。西側世界と協調する民主国家に生まれ変わる。ミロシェビッチが勝てば、ユーゴスラビアは、ボスニア全土を支配するまで戦いつづけ、モスLEM人を最後の一人まで追い出すだろう。そうすることで、あの男は国内のセルビア人の支持を集めようと考えている。国際社会からどのような目で見られるかなど、ミロシェビッチはまったく気にしていないのだ。そうなれば、バル

カン半島は、この先もずっと不安定でありつづけることになる」と、パニッチは切り出した。

ロシアと中国の二人は大きくうなずき、あとの三人に向って、「私にはあなたがたと交渉し経済制裁をやめさせる力がある、と国民は信じている。だから私は支持されているのだ。今ここで、私の目の前でユーゴスラビア連邦が国連から追放されれば、国民は私を信用しなくなる。それでいいのですか？ 私が失脚し、あのミロシェビッチだけが力を持つユーゴスラビアになってもよいのですか？」と、《半分は脅しのような論理》で追い打ちをかけた。《だが、ミロシェビッチがすべてを支配するユーゴスラビアが西側諸国にとって望ましいものでないことは間違いない。》フランスが支持を表明し、続いてイギリスが《セルビア非難の先陣を切っていたこれまでの姿勢からは大転換》して、《どちらつかずの中立的な態度に変わった》。パニッチが《未だに市民権を保持している「祖国」であり、《最も期待をかけていたアメリカ》が残った。

イーグルバーガー国務長官代行に向き直ってパニッチは、「この11月には、大統領選挙がありますね。もし私を支持しなければ、この選挙の行く末に影響するような何かを、私は言うことになるかもしれない。それでもいいですか？」と、《いちかばちか、危険ではあるがとっておきの切り札を出》した。《パニッチがユーゴスラビア連邦首相になる直前、ブッシュ大統領は、アメリカの市民権をもったままユーゴスラビア連邦の公職につくことが、発動中の経済制裁に触れる恐れが大きいかかわらず、それを問わないと約束していた。その詳細を暴露するという意味にもとれた。》緊張が最高潮に達する中、イーグルバーガーはパニッチを見据えて、「もし、私があなたの立場にいたら、そのようなことは絶対言わないだろう」と厳かに言った。《パニッチの発言は、アメリカに向けられた脅しと受けとられた。ユーゴスラビア連邦首相の脅しに、アメリカが屈することはなかった。》

最後に残されていた《話し合いの余地》をパニッチは自身でつぶし、彼の《不用意な言葉は、その最後の^{いちろ}一縷の望みをも打ち砕いてしまったのだ》。冷戦崩壊後、唯一の超大国であるアメリカを説得できなかったことが、《他の4カ国にも大きく影響した》。「私はアメリカの市民として、ユーゴスラビア連邦の政権を、私が最も優秀なシステムだと信じているアメリカ政府のような組織に変えようとしていたんです。それなのに、そのアメリカが助けてくれませんでした。あそこで国連追放の阻止をアメリカが承諾してさえいれば、ユーゴスラビア連邦に民主主義が始まっていたはずなのです。しかし現実には『パニッチはアメリカと話をつけることができないじゃないか』という評価になってしまいました」と、パニッチは今も憤懣やるかたなく語るが、結局はハーフとのPR戦略に敗れ、ミロシェビッチとブッシュの双方から見捨てられることになった。

国連総会でのユーゴスラビア連邦追放決議案の採決前に、パニッチは、「昨日のボスニア・ヘルツェゴビナ大統領の主張は間違っています。私は 民族浄化 をやめさせよ

うと奔走しています。どうか、この努力の足をひっぱるようなことはしないでいただきたい」と演説を試みたが、投票結果は《ユーゴスラビア連邦追放に賛成127カ国、反対6カ国、棄権26カ国。反対にまわったのは、タンザニア、ジンバブエ、ザンビア、スワジランド、ケニア、そしてユーゴスラビア連邦だった。》最後の面目を保つようにして、《議長が、投票結果を読み上げる声が議場にひびく中、パニッチ首相をはじめ、ユーゴスラビア連邦代表団のメンバーは、机の上の書類をまとめ、各国の議席の中にもうけられた通路を通過して退場した。議場にいるほかの国々の外交官たちは、ほとんどその姿に視線を送ることもなかった。》

ユーゴスラビア連邦を国連から追放し、《セルビア人を国際社会から完全に追い出すことによって、《ハーフのPR戦略は所期の目的を達成した》。あとに残ったのは、ボスニア政府からルーダー・フィン社に支払われるPR料の問題であった。「ルーダー・フィン社は気が遠くなるほどの時間を、ボスニア政府のために費やしました。しかし、支払われた金額はわずかです」とハーフは証言するが、財務省のような機関が存在していなかったため、ハーフは直接請求書をシライジッチに手渡していた。《しかし、シライジッチは支払いのことになるといつも気分を害した。そして、国際的なビジネス慣行の基準から考えると奇行としか言いようのない行動をたびたびとった。》たとえば、1万2千ドル程度の支払いでも、口座振込みではなく、トラベラーズチェックで支払おうとしたり、マレーシア銀行のロンドン支店が出した、ドルではなくポンド建ての見たこともない《小切手帳に金額を書き込んでハーフに投げてよこ》すなどした。

「この仕事は、金をもうけようというものではありませんでした。しかし、ルーダー・フィン社は一つの民間会社で、私たちがしているのはビジネスだ、というのも事実です」とハーフは正直に述べているが、大統領選挙はクリントンが勝利し、《ハーフとシライジッチのPR戦略も、新規まきなおしが必要になっ》て、シライジッチが訪米したある日、ハーフが上機嫌のシライジッチに以前のマレーシア銀行の件を持ち出し、「マレーシア銀行の小切手はアメリカで現金化するのに時間がかかるのです。つい最近、ようやく手続きが完了したのですが、その間にポンドの価値がかなり下落してしまいました。ですから、その為替差損分を支払ってもらわなければならないのです」と話すと、たちまち表情を曇らせた《シライジッチは、何も言わず、突然立ち上がった。そして自分のスイートルームに駆け上がると、小切手帳を持って戻ってきた。今回の小切手はドル建て》で、《金額を書き込んでサインし、ハーフに渡す》と、一言《叫んでそのまま立ち去った》。

「これがお前らと仕事をする最後だ！」という、ハーフにとっても珍しい罵声で、事実上《両者の関係は終わった》。ルーダー・フィン社が司法省に提出した報告書に記載されている、ボスニア政府との契約期間は翌93年1月までで、《報告書によれば、ボスニア政府から実際に支払われた金額はおよそ9万ドルに過ぎない。ハーフたちを非難す

るセルビアのメディアは、この数字はあまりに少なく信用できない、じつはモスレムを支援する多額のアラブマネーが流れ込んだのだ、と主張しているが、証拠はない。ルーダー・フィン社は、ボスニア政府とのビジネスで経済的には大幅な「持ち出し」だったと思われる。

しかし、このビジネスはルーダー・フィン社とハーフに金に換えられない価値をもたらした。

ハーフは、ボスニア政府との仕事が終わるとすぐに、全米PR協会の年間最優秀PR賞に応募した。そして「危機管理コミュニケーション」部門で最高位のシルヴァー・アンビル賞を受賞した。それはハーフの仕事が全米にあるおよそ6千のPR企業の中で最も優れた業績として認められた、ということだった。それはこのところ業績ががんばり少なくなっていたルーダー・フィン社の評価を高める絶好の機会だった。

優秀なPR企業を探す各国の企業や政府の間で、「ボスニア・ヘルツェゴビナの危機を救ったPR企業ルーダー・フィン、その凄腕PRマン、ジム・ハーフ」の評判は、着実に広まっていった。

「私たちの世界では、口コミが最もよい広告になるのです」

とハーフが言うように、次の仕事の依頼が続々と入ってきた。

「ボスニア紛争という、誰の目から見ても大きな国際的危機で成果をあげたということは、素晴らしいPR効果につながりました。なぜなら、この能力は、民間企業の危機管理対応にも当てはめることができるからです。ですから多くの民間企業がルーダー・フィン社と契約したいと言ってきました」

原子炉の炉心を作るメーカーから、水道管を製作する会社まで、製品に欠陥が発生し、対応を誤れば会社の存続が危うくなる、という危機的状況にある会社が次々とルーダー・フィン社に助けを求めてきた。たとえばボスニア・ヘルツェゴビナ政府からの支払いは十分でなくとも、その分を補ってあまりある利益がもたらされたのである。》

ボスニア紛争の舞台からハーフが退場し、次に《この年12月、ミロシェビッチ大統領が現職につくセルビア共和国の大統領選挙》に立候補して、《徹底的にアメリカ型の選挙キャンペーンを張》り、《テレビコマーシャルの枠を大量に買い、世界の首脳と握手する自分のイメージを一日中何回もテレビで放送し、街をパニッチのポスターであふれかえらせた》パニッチが、ミロシェビッチの56%の得票率に次ぐ34%で敗れ、《直後、連邦議会の上下両院で、パニッチ首相不信任案が可決され》ることによって、《政治生命を完全に絶たれ、アメリカに帰ってICN製薬のCEOに戻った》。

翌93年10月、外相から首相になったシライジッチは、《海外を飛び回る生活から首都サラエボに戻り、イゼトベゴビッチ大統領とともに政府を切り回し》、ハーフ仕込みの「メディア戦術の巧妙さ」を発揮しつつけた。《ボスニア紛争はその後1995年11月、オハイオ州にある米軍基地で行われた交渉で和平合意が成立するまで続》き、

《サラエボに平和が戻った後、国内の政治闘争に敗れ》たシライジッチは、公職を退き、《今は自らの小政党を率いて政治活動を続けている。》

97年にセルビア共和国大統領から、ユーゴスラビア連邦の大統領になったミロシェビッチは、《99年に、コソボ自治州に軍隊を導入してそこに住むアルバニア人を弾圧した》。このコソボ紛争でも、《再び、ボスニア紛争と同じように「民族浄化」という言葉が西側メディアの「パスワード」となり、セルビア人によるアルバニア人の虐殺や人権侵害がくり返し報道され》、PR企業も活躍した。《ハーフ自身が、コソボ自治州のアルバニア人の穏健派を代表するコソボ民主同盟と契約していたことがあったし、武装組織コソボ解放軍（KLA）も別のPR企業を使って情報戦を繰り広げた。ミロシェビッチは再びPR戦争で後れをとり、今回もまた悪いのは全面的にセルビア人、ということになった。激昂した国際世論に押されるように、NATOによるセルビア空襲が行われ、ベオグラードを含むセルビア本土の、軍事施設だけでなく、橋や鉄道、放送局などの民間施設も爆撃されて、多くのセルビア人が命を落とした。》

ミロシェビッチはその後、《2000年9月の大統領選挙で敗北した。権力を失ったミロシェビッチは、翌2001年4月にセルビア共和国政府によって逮捕され、オランダのハーグに設置されている国連の旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷に送られた。現在公判が始まっていて、ミロシェビッチは拘置所と法廷を往復する生活を送っている。》『ドキュメント 戦争広告代理店』の著者高木徹は、ルーダー・フィン社から独立したハーフが、《国際政治を舞台に、一つの民族の指導者を相手に》、現在も旺盛な営業活動を行っている姿を書きとめて、締め括ろうとしている。

「紛争は常に世界のどこかでおきています。これからもそうでしょう。チェチェン、キプロス、スペインのバスク独立派、そして朝鮮半島。紛争の種は世界中に散らばっているのです。ボスニア紛争のときに比べ、社会の情報化がはるかに進んだ現在、私たちのようなPRのプロの存在はなおさら欠かせないものになっています。紛争を戦う双方のサイドに言い分はあるはずです。私たちは、そのどちらの側にも立って、世界に向けてその主張を発信するお手伝いができるのです」とハーフはインタビューに答え、彼の経営するPR企業「グローバル・コミュニケーターズ」社のウェブサイトには、「私たちの危機管理コミュニケーションスタッフが果たしたボスニア紛争での業績は、全米PR協会のシルヴァー・アンビル賞を受賞しました。私たちは、存亡の危機に直面する国々の要請にもこたえているのです」という言葉が並んでいる。

ハーフの授賞と同様に、00年10月放送のNHKスペシャル「民族浄化～ユーゴ・情報戦の内幕～」はカナダの第22回バンフテレビ祭ロッキー賞（社会・政治ドキュメンタリー部門）候補作となり、本書『戦争広告代理店』は第1回新潮ドキュメント賞を受賞している。

2003年12月7日記

